

アルナルド・ポモドーロ

《太陽のジャイロスコープ》 1988

重さ5トンの球体は、中世の天球儀から着想を得て創られたという。私はこの作品を見て、2つに分裂した分厚い円盤の表面に刻まれた幾何学模様には、精密な都市空間を思い浮かべた。一方、そこに走る鋭い裂け目からは、マグマのように吹き出す社会の矛盾や人々の不安を連想した。

誕生から30年余り。その間、生々流転する日本社会をじっとみつめてきた巨大な球体は、この静かな部屋に佇んで何を考えているのだろう。



ガイドスタッフ M

オノサト・トシノブ 《赤の線の鳥》 1953

丸を一つの色で塗ることから「ベタ丸」の作家としても知られるオノサト・トシノブさんの作品の中で、線で構成されたこの絵は少し異色です。ただ、線の赤い色や、いくつもの丸が交錯する画面は、オノサトさんならではの。そして、この作品が描かれた1953（昭和28）年には、第二次世界大戦後の混乱がまだ残る中、養鶏で暮らしを支えていたことを考えると、毎日、面倒を見ていたニワトリを見る温かい視線を感じます。この部屋に展示されている「ベタ丸」の作品に引かれたいくつもの細い線は、鶏舎のケージからヒントを得たのかもしれないですね。



ガイドスタッフK

末松正樹 《[1945.6.27]》 1945.6.27

新しい舞踊をドイツで学びたいという希望を叶えられないまま、抑留されたペルピニャンのホテルの中で、末松はデッサンを描き続けました。その時、末松の頭の中にはきっと様々な音楽が流れていたことでしょう。私はこの作品を見ていると音楽が聞こえてきます。ドビュッシーやビル・エヴァンス、その日の気分で変わります。皆さんにはどのような音楽が聞こえてきますか。頭の中に好みの音楽を思い浮かべて、作品を鑑賞してみてください。

ガイドスタッフI



藤田嗣治 《千人針》 1937

パリを舞台に一躍著名になった藤田が、初めて戦争を主題に描いた作品とされています。制作は日中戦争開戦の年。当時、兵士の幸運を祈る女性たちによって「一人一針」の協力を請う姿が全国に広まりました。本作は、自らも手芸を得意とし、装うものなど身のまわりのものから大工仕事も手掛けたという彼らしい視点から、戦場ではない日常生活が描かれていると思います。パリで称賛された乳白色の下地、足元から着物・髪型に至るまでの細かな描き分けや針を持つ指の、油彩による確かな線描にご注目下さい。



ガイドスタッフ K

佐藤照雄 《地下道の眠り》 1947-56

野生の動物のようだ、と先ず思った。すやすやと安らかな眠りではなくて、もっと夜の底に落ちていくような深い眠り。明日を生きるための眠りは野生動物のそれだ、と。

このデッサン群が描かれたのが、敗戦後すぐから10年間の上野の地下道であると知って、人々の姿に野生動物が重なった。兎にも角にも生きねばならぬ人々が集まっていた地下道。その放つエネルギーに、画家佐藤照雄が取りつかれるようにして、上野へ通い描いた人々。静かだけれどもつよいデッサンから感じるのは、戦後の辛苦よりもむしろ生きる人間の神々しさだ。



鶴岡政男 《重い手》 1949

あなたはここに何が描かれているのだと思いますか？  
戦時下の規制に反発しつつ貧しい中で絵を続け、東京大空襲で自宅や作品の大半を失いながら、戦後も活躍した鶴岡は、敗戦直後の上野駅周辺で寝泊まりする人々の姿をきっかけにこの作品を生み出しました。

圧倒的な存在感を持った何か。不思議な背後の構造物。  
題名の《重い手》も気になります。見れば見るほど謎は深まるばかり。だからこそ、時代を超えて訴えかけてきます。コロナ禍に置かれた現在の状況に重ね合わせて見てしまうのは、私だけでしょうか。



ガイドスタッフ N

## 鈴木賢二の版画作品について

昭和の様々な社会不安のなか生活する人々を、大人からこどもまで、独自の視点で表現した鈴木賢二の木版画です。

《式根・新島・御蔵・三宅》は1961年に当時の防衛庁が新島にミサイル試射場の設置計画をしたことへの反対運動の折、新島を訪れ制作されたもの。作業する女性の衣服やカゴなど細かなところまで表現され、よくみると遠くの民家などにも人々の姿が。

多くを刷ることにより、広く人々に普及できる版画には鈴木のメッセージが込められています。

皆さんはどの作品が目にとまりましたか？



浜田知明 《初年兵哀歌（歩哨）》 1954

骸骨の様な身体、ヨレヨレの軍服、襟章は星1つ。歩哨に立つ初年兵は銃口を喉に当て、足の指を引き金に掛けています。目からは一筋の涙。

作者の浜田知明は、1939年に東京美術学校卒業後すぐに召集され、中国大陸に送られました。20代を戦争の中で過ごした浜田は戦後10年近く経って、その体験を「初年兵哀歌シリーズ」の作品に込めました。単純化された画面と白黒の世界が作者の思いを強く伝えています。

浜田は100歳で亡くなるまで、人間の不条理をブラックユーモアに包んだ作品を発表し続けました。



ガイドスタッフY



ガイドスタッフK



荒木高子 《聖書シリーズ》 1979

こちらに並んだ三点の作品、何でつくられていると思いますか？ 薄いページ一枚一枚、それぞれに異なる質感などをじっくりと見て、何でできているかを考えてから、この先をお読みいただけたらと思います。

実はこれらは三点とも、お茶碗などと同じ「磁土」を使った陶芸の作品です。陶芸と聞いて思い浮かぶイメージとは、全く異なるのではないのでしょうか。細部まで本物のようでありながら、普通の聖書とはまるで違うこの作品は、時空を超えて現れたようでもあり、どこかの遺跡から出土したようでもあり、見れば見るほど様々な想像をかき立てられます。

松江泰治 《JP13-02》 2017

「JP」は、日本各地を空撮したシリーズで、タイトルには東京都を表す“13”という都市コードが振られています。この作品は、2017年、ヘリコプターから撮影した新木場の貯木場の風景です。江戸から東京へ、木場から新木場へと移り変わる歴史の中で、「木」と共に生きる土地をとらえた作品です。松江さんの作品は、影がうつらない順光のもとで、画面全体にピントの合った均質さや鮮明な細部を持つ平面性が特徴です。この作品では右側に船や、船の左上に人が作業する姿もとらえられています。



ガイドスタッフK

松江泰治 《TYO 3525》 2017

マンションのベランダがマス目のように整然と並ぶ、2017年に制作された松江泰治、初のパノラマ写真作品です。CGではなく、実際の東京の風景を撮影しています。よく似た風景が、東京都現代美術館から歩いて15分ほどの運河沿いでも見られますので、美術館で作品を見たあとに、ぜひ運河沿いを散歩して、似た風景を探してみてください。



ガイドスタッフS

mamoru 《THE WAY I HEAR, B.S. LYMAN 第五章  
協想のためのポリフォニー》 2015

北海道に父方のルーツをもつアーティストの mamoru さんが、一枚の地質図に出会い心ひかれ、作品が生まれました。明治時代に北海道の地質調査にあたったアメリカ人地質学者ライマンについて詳しく調べ、その足取りをたどりながら現地で様々な記録をとっていきます。

「聞こえますか？」そして「みえますか？」

「聴くこと」から広がる豊かな架空の「音風景」へと私達は導かれます。夕張の自然や歴史、人々と、今を生きる私達が時空を越えて出会い響き合って、新たな世界が「協想」されます。



オノ・ヨーコ

《インストラクション・ペインティング》について

好きな言葉はありますか？ 元気の出る言葉を持っていますか？ 言葉は想像の世界への入り口です。

オノ・ヨーコの夫ジョン・レノンも、彼女の文章の中の「IMAGINE」という言葉に刺激され、あの名曲「イマジン」を作りました。オノ・ヨーコの作品は、あなたが作品に参加しなければ完成しません。

YES    REMEMBER    FORGET . . .

さあ、彼女の言葉から、あなたも想像の世界に旅立ってください。



ガイドスタッフO

オノ・ヨーコ

《インストラクション・ペインティング YES, FLY, DREAM》

正面の YES を見上げ歩いていく時、作品のつくる空間が私達をやさしく包んでくれているような気持ちになりませんか。DREAM, FLY, そして YES… 作品が語りかけています。ここは私達を肯定してくれ、心に自由を与えてくれる場所のように感じました。

この空間でご自身の心に尋ねてみる、また、大切なご家族やご友人と作品の言葉をきっかけにお話をするのはいかがでしょうか。言葉たちが架け橋となり、作家、作品、ここにいる人は繋がることができます。



岡本信治郎 《銀ヤンマ（東京全図考）》 1983

やわらかな色彩の中、ふわりと飛ぶ巨大トンボ。のどかな雰囲気にも思えますが、よく眺めると、何が見えてくるでしょう。

作者の岡本信治郎は東京の下町で育ち、少年期に戦争を体験しました。この作品は当時下町で身近な存在だった昆虫と B29 が重ね合わされ、楽しい記憶と戦争という対照的要素が溢れんばかりに描かれています。トンボの眼下には鳥瞰図のように当時の東京が広がります。さて、東京都現代美術館はどの辺りにあるでしょう？ 一見軽やかなトンボ、今はどんな印象でしょう？ 隣室の鉛筆画バージョンと併せ、様々な発見をお楽しみください。



ガイドスタッフT

岡本信治郎 《積み木倒し・ニューゲルニカ》 2002

あ！ポパイ見つけた！カラフルで賑やかで見て楽しい♪

あ！ピカソの《ゲルニカ》と同じミノタウルス発見！

文字から血が流れている！？

あ！画面全体に広がる赤い斑点はまるで今の中を象徴している様で少し不気味・・・

作家は 2001 年同時多発テロをきっかけに、もう一度自分の過去を捉え直しつつ、これから先の未来を考えながら制作したそうです。さて、作品全体を見て読んで楽しんだら是非、床面の作品をご覧ください。飛行機の模型が乗っています。そして、何かが粉々になったかのように細かく描かれた中には、楽しげなモチーフと少し不気味なモチーフが混ざりあっています。私は昨今耳にする「新しい日常」というワードが頭に浮かびましたが、皆さんは何を感じますか？



ガイドスタッフK



豊嶋康子 《殺菌》 2006



ガイドスタッフ S

学生時代に「どうして四角い画面に描くの？」と聞かれて答えられず、「理由もなく当たり前だと思い込んでいたことに気付かされた」という豊嶋さんは、日常生活で無意識に受け入れている決まり事や仕組みと自身の関わりをテーマに制作を続けています。

紫外線カットフィルムで覆われた本作の展示ケースは、殺菌灯が放つ紫外線から作品を守ることから、外側にいる鑑賞者を守ることへと使用目的が変わっています。

豊嶋さんの作品は、私たち社会の「当たり前」を、異なる視点から見て考えてみよう！ と提案してくれているようです。



ガイドスタッフT

## 豊嶋康子 《パネル》シリーズ

あれ、遠くからみたら絵が掛けてあるようだけど、ただの1枚の板みたいだ。ずいぶん傾いていて、なんだか変だな。裏をのぞいてみたら木切れがモザイク模様のように貼られている。こっちの方がきれいで面白い。これも、あそこのパネルも、全部裏の方が表みたい。

そこまで発見できれば大成功！「絵画は壁に掛けてある」という私達があたり前と思っている事を少し変えてみる。豊嶋さんは「絵画とは？」「表と裏とは？」という根本的な問題を改めて考えるきっかけを与えてくれているのです。あなたも先入観を捨てて目の前のものを見つめ直してみてください。

シャジア・シカンダー 《やむことの無い煽動》 2009

トランペットやホルンといった楽器と演奏者…と  
思いきや、それらに絡みつく腸？寄生虫？のような  
ものあり、マシンガンや手榴弾みたいなものも  
あり。ぱっと見たところカラフルでソフトと感じた  
色が、急に血のように思えてくる。なんだろう、  
この組み合わせ…。心がざわざわする。

伝統工芸である細密画にドローイングやアニメー  
ションといった要素をとりこみ、新しい表現を追求  
しているシカンダー。この作品は彼女が軍楽隊から  
着想を得たとのこと。彼らが重火器に囲まれながら  
人を鼓舞する音楽を奏でるように、純粋な平穏なんて  
ないのかもしれない。



ガイドスタッフF

モニール・ファーマンファーマイアンの作品について

イランにシャー・チェラグ廟という、「光の王」を意味するモスクがあります。その名にふさわしく、ミラーモザイクが施された内部は、まるで万華鏡のように光が溢れています。モニール・ファーマンファーマイアンは70年代にこのモスクを訪れ、その壮麗な美しさに圧倒されると同時に、伝統工芸の可能性を見出しました。アメリカで美術を学んだモニールは、現代的な抽象表現によるミラーモザイクの作品群を、高度な技術を持つ職人たちと共に生み出し、中東を代表するアーティストとして2019年に94歳で亡くなりました。



ガイドスタッフY

草間彌生 《戦争》《戦争の津波》《無名戦士の墓》 1977

闇の中に光を帯びながら浮かび上がるものは何でしょう？ 何が見えますか？ これらは雑誌や本から切り抜いた写真などを貼り合わせるコラージュという表現方法で制作されました。

背景の深い闇は色画用紙を黒のパステルで塗りつぶして作り出した『闇』です。こんなに真っ暗な『闇』を私たちにも作り出せるでしょうか。試してみたくありませんか？ 作家はどんな気持ちでパステルをにぎったのでしょうか？

90歳を迎えてもエネルギーに制作を続ける草間彌生ですが、これは大切な人の死と向かいあう日々が続いた48歳の頃の作品です。



宮島達男

《それは変化し続ける それはあらゆるものと関係を結ぶ  
それは永遠に続く》 1998

展示室内にある椅子に座って、作品をゆっくり眺めてみてください。数字のカウンターの集合体であるこの作品、1つ1つのカウンターを目で追っていくと、共通のプロセスを踏みながらも、それぞれの動き方のスピードや表示の明るさに違いがあることがわかります。独立した個の集合体から全体が成っているようです。個人的な見解ですが、タイトルの「それ」を人として置き換えてみると、人同士が繋がりあい、個性が活かされる社会、その社会は瞬間瞬間で変化しつつ、輝き続けるということが作品で表現されているように見えてきます。



ガイドスタッフT

アンソニー・カロ 《シー・チェンジ》 1970

あ、きづいてくれました、この作品に。ありがとうございます。  
ございます。

木場公園の木々と呼応するかのような緑の物体。  
色や形・大きさから、どんな印象をもたれました  
でしょうか。

あらためて、キャプションをご覧いただいてから  
作品を見ると、素材から想像される重さや、タイトル  
から浮かぶ情景に最初とは異なった印象を持たれ  
る方もいらっしゃるかと思います。それもまた、  
この作品の魅力のひとつなのです。



ガイドスタッフ A